

文芸

俳句

流星を待たてて虚なる酒の瓶 池田 逸子
 童顔の形象埴輪草もみじ 伊藤 敬子
 御神木後と守りて神の留守 伊藤 定男
 鳥居ぬけ夜空のキャンパス冬桜 今関満喜子
 十六夜や薄はあれど酒はなし 魚地 照子
 灯さずに名残りのすだめ惜しみけり 江森 悦子
 宝輪やめぐる憂き世の錆雲 川島 孝夫
 絵馬札の風に吹かれて神は留守 川島 通則
 木守柿黄金の光はならけり 向後 寛
 神無月妻留守するも三日迄 越川 義則
 塩むすび秋をらざりし梅ころり 小松 藤男
 星堂に取り残されし柿一つ 佐瀬 輝夫
 書き慣れしペン先古りし夜長かな 宍倉 道子

孫い抱くごとくに菊の手入かな 玉虫 栗扇
 大鳥居威風と護る神の留守 土屋 義昭
 小春日やねねの館と垣間見し 戸村 静菫
 球根を植えし心は春を待つ 西崎さち子
 さまざまな冬の出来事背に感じ 長谷川正子
 変りなく過してますか今朝の冬 早川 勇

短歌

入院を覚悟して日延べされ 喜ぶべきか悲しむべきか 鈴木 益郎
 いたすらに定年なき農に生き 今ほ老いの身の健康守る 土屋 好
 猫親子重なり寝むる部屋のみ 冬なれや西陽の入りて 越川 福子
 車椅子漕ぎつづ乗りしを確かめて エレベーターの扉閉まりぬ 青木 秀子
 透き徹る秋の大きを吸ひ込みぬ 肺活量のとぼしき胸に 佐瀬 初音
 黄葉の始まりそのし櫛木の 並木漏れくる日差し明るし 鈴木まさ子

杉の葉のイアリングつけ耳長の 犬戻りしが取らず置きたり 大場 和可
 槇の木に朱く色付く烏瓜 風に小さく揺れてゐるなり 池田 春江
 仕上がりし大正琴の合奏を テープに採りて友と聞き入る 平山 芳子
 二歳なる男孫の笑顔思ひつつ 生筋子よりイクラと造る 田崎 尚美
 改築の成りし生家は甥の代 父母の墓参も稀となりゆく 吉岡 信子
 朝霧の徐徐に薄れてほんのりと 今日といふ日の現はれてきぬ 八角 三枝

偶然の仕草を会釈と取り入れしか 「こんにはらば」と挨拶されぬ 島田ますみ
 山里の集団移転の家跡に 秋の夕陽の沈みゆくなり 芹川 初子
 ペゴニア園の花の残はブルの中と 朱・黄・紅と寄り添い巡る 西山満里子
 ブロックリーの苗は嵐の過ぎし後 傾くままに育ちゆくなり 押尾 輝子
 里に住む老い等活力行持らませと お食事会を開きくれたり 齊藤つね子

こうほう博物館 21

小川台古墳出土の鹿はにわ

町の北部や西部を占める台地の上には、数多くの古墳があります。最も有名なものは多くの人物埴輪が出土した中台の殿塚・姫塚古墳、また鹿の埴輪が出た小川台の古墳群などが挙げられます。このように古墳からは埴輪が出てくることは知られ、特に人物埴輪は当時の服装とか流行の習俗を推測することが出来る数少ない資料となります。今回はそのような人物埴輪ではなく、小川台古墳から出土した珍しい鹿の埴輪について話してみよう。

鹿の埴輪は他の古墳からも出土していますが、小川台古墳から出土したものは角が付いた埴輪で、このような例は他ではあまり見られません。この埴輪は昭和五十一年に発掘調査されたとき、前方後円墳である五号墳から、人物埴輪や馬埴輪などと共に出土しました。五号墳は長さが三〇mある前方後円墳という平面形で、西側に前方部があつて幅が一八m、東側に後円部があつて径二一m、高さは二・六mの、比較的小さな古墳です。古墳は調査時には南側が少し削り取られていて、不正形になっ



▲出土の鹿はにわ

ていました。埴輪は古墳中央のくびれ部北側の中腹に、置かれた時の位置を保つて人物埴輪の下半部が出土し、そのほかは散乱した状態で出土しました。人物埴輪は武人や婦人、馬は頭部が、そのほかに鶏や水鳥などと共に鹿があり、数は決して多くありませんが、種類は多様です。このような中から出土した鹿埴輪は、残念ながら首から上の頭部しか見つかりませんでした。それでもその形から鹿の様子が窺うことができます。顔が短く全体にずんぐりした風貌で、角も太く短く稚拙な作りですが、鹿の特徴をよく表しています。この埴輪から古墳時代には、この地域にも鹿がいたことが想像されます。(写真提供 芝山町立古墳はにわ博物館)